

# 飛身長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻85号 平成22年12月1日発行

## 「修身教授録」探求 (第五十回) 「女のだらしなさ」

森 信 三

これは私かねがね思うことでありますが、女の本性というものは必ずしも普通に世間で考えられている程に、しまりのよいばかりでもないように思うのですがいかがでしょう。なる程女は男子の前であつては割合に引き締まりがあるように見えますが、一たび女だけが一人置かれるようになります、もちろん例外は多々あることでありましようが、しかし必ずしも普通に考えられている程に締まりの良人ばかりでもないようです。

私は小学校の生徒の頃、ある女の先生の所へ校長先生からお使いにやらされたことがあります。その時その女の先生が何かの拍子に襖を開けられたところ、その押入の中には穿き古して真つ黒になつた古足袋が文字どおり山のように積まれていて、その印象が今日この歳になつてもいまだに消えやらないで残っているのです。

もちろんこれなどは特殊の場合であつて、これを以て全般を推すことのできないことは申すまでもありませんが、しかしその女の先生は、幾人もの女の先生の中では、決してだらしな一方ではなかつたことを思えば、そこに考えしめられるものがないとは言えないで

しよう。もちろんお年の若かつたせいもありましようが、しかしいづれかと申せば、一番しやんとしたその方をして、なおかつ斯様であつたということは、女の本性というものが、必ずしも普通に考えられる程に締まりあるのみ言えないかと私には思われるのです。

そこでこういうことになるかと思ふのです。すなわち婦人が男子に比して一応締まりあるらしく見えるのは、実は男子に対しての嗜みからであつて、もし女独りだけとなると、案外そのだらしなさが生地のままに出るのではないかということ。もちろんこのことは現実にはいろいろ例外の多いことでありましよう。しかしながら少なくともあなた方自身の反省としては、このことは非常に大切なことではないかと思ふます。そもそも反省ということは、実際には不公正な酷評と言われるものすらも、これを受け容れこれを消化することによつて、初めて我が心の内容が豊かになるものでありましよう。そこで私の以上の申し分がはたしてどの程度にあたつてゐるか否かは、もちろん私自身にもよくわからないことではありますが、ただ私には何とはなしにそういう気がしてならないのです。しかしその当否は別問題として、とにかくあなた方としては、反省の一資料として深く忘れないでいただきたいと思ふます。

普通に女の人は、男子は大雑把であるが、

自分等は丹念に細やかであると思つてゐるようでありませう。勿論そういう場合の少なくともいことは今更申すまでもないことですが、同時にまた必ずしもそうばかりとも言えないのであります。いや私の考えますところでは、

あなた方のうちで将来結婚後、御主人の方が女としてのあなた方より、掃除整頓などやまましいという場合が必ず何割かはあろうと思ふのであります。それを男とさえいえば、みんな女よりだらしのないものと勝手な独り決めをしてゐると、それこそ大変なことになるまいでしょう。現に最も手近な証拠を一つ申してみれば、この間の天師の男生徒の手になつた

修身教授録の事細かな記述に対しては、あなた方も意外に驚きを感じられたようであります。このことは現にあなたがたの中にも素直にその感じを記した人がありました、実際ああ言う事細かな丹念さというものは、女の人の間には容易に見出し難いことでありませう。実際多くの女の人は、男は自分たち女よりも大雑把なものと考へてゐるようであります、事実がかへつて反対の場合が少なくないと思ふのです。少なくともある種の点に關しては、男子の方がはるかに丹念に事細かにやるものであります。この点あなた方も今日からよほど注意してゐないと、将来特に結婚生活に入つてからいろいろ間違ひが起ることであります。実際今日のような女子教

育の有様では、結婚後子供が病氣ひとつして、その手当は御主人に遠く及ばない奥さんが少なくないことでありませう。育児とか子供の病氣の手当等ということは、申すまでもなく母親としての最大の責任でありながら、終日外でその勤めに疲れ果てて帰つた御主人の手を煩わさねばならぬということは、何と申しましても、今日の女子教育の根本的な誤りというほかないでしよう。かくして家庭内問題の多くは、結局主婦たるもののだらしなさその原因をなす場合が多いと申してよいでしよう。

おそろく将来あなた方の結婚生活においても、うっかりするとあなた方よりも御主人の方がかへつて万事に丹念で細やかなという場合が少なくないであります。少なくともある種の事柄については、あなた方が男子としての御主人よりもだらしのないというべき事実があるうかと思われませう。いつも申すことではありますが、今日子供の躰けというところが一般に世間の父母の心から次第に薄らぎつつあるようであります。しかしながら人としての土台は何と申してもその家庭における躰けのほかないであります。殊に女の子は将来家風習慣等いつさいの模様の違ふ家にお世話になるかもしれない身でありますから、女兒の躰けは特に両親の心遣ひが大切です。しかるに近頃では、この「女の子なるがゆえ

に」という自覚に基づく躰けの厳しさが次第に薄らいで来たようであります。ところが男子の方は寄宿舎とか下宿とかその他職務上の勤めとの関係などからして、如何に良家の子弟と言へども、ある程度に世間の風波にもまわつてゐるところがあります。そこで躰けのない家庭で我慢氣儘に生い立つて、結婚のその日まで世間の苦勞というものを知らない現在の娘さん方たには、どうしても男子にかなわない点があるのはむしる当然とさえ思われるのであります。

今ご参考までに婦人のだらしなさの二三を申してみますれば、まず食事の済んだ後、すぐに食器を洗わないだらしなさ、あるいは朝起きると同時に、寝間着を着替へて夜具を始末しないだらしなさ、また夜具の畳み方の不揃いなのを一向気にせぬだらしなさ、あるいはまた便所の草履を不揃いにそそくさと脱いで平氣でゐるだらしなさとか、着物を畳の上に脱ぎつぱなしにして置くだらしなさとか、新聞を読みつぱなしにして後始末をしないだらしなさとか、襖を立てる場合立て切らないで一二寸開けたままで平氣でゐるだらしなさとか、また着物や夜具を踏んで平氣でゐるだらしなさ。またハガキ手紙の類の置き場所を決めないだらしなさとか、シャボンを使つて水も切らずにそのままにして、あとをぐちゃぐちゃにさせるだらしなさとか、さらにはなほ

だしきは、男の下駄を突っかけて平気でいるだらしなごとか、まあ斯様なことをいちいち挙げていたら實際際限のないことでありましよう。男子には自分の下駄が左右反対に出されても気になるという人間が、少なくとも半数以上はあると申してよいでしょう。

これらのことを考えてきますと、女と男といづれがはたして真に縮まりがあり、いづれが果たしてだらしないか容易に分かつたものではありません。近ごろの若い人々の家庭では、あるいは女の方がだらしない方が多いかもしれません。それでもそれを素直に御主人の注意によって改めていけば問題はないのですが、我見の強い近ごろの若い婦人は、なかなか素直に御主人の言を聞いて改めようとしていない。元来斯様な実行上に関する事柄は、一度そのだらしなさを他人から指摘されたならば、全身冷汗を浴びて恥入り、二度と再び斯様な誤りはすまいと意地にも決心するのが本来であるのに、近ごろの若い婦人は意地の用いどころを間違えて、かかることを指摘する御主人に対して、兎角の口答えをしたり、はなはだしきはふくれ面をしたりするようです。そこでよほどの御主人でない以上、ついにはうるさがつて本当ではないと知りつつ、つい一々注意をしなくなる。するといよいよそれをよい事にして一生そのまま押し通すことにもなるのです。ところが斯様な母親に

育てられた娘は、またそれを当たり前として結婚後もまたその調子でやりますから、かくして全く尽きる期がないとも言えましよう。

そもそも婦人というのは、男子の気付かぬところまで、こまごまと思いやつて、向こうに知られぬようにそつと注意しておくというようではなくては、真の女甲斐がないと申さねばなりません。それが男子の下駄ひとつ満足に揃えられないで、左右を入れ違っても平気であるという程度の大雑把さでは全く問題にならないわけです。また家族の人々のご飯のつぎ方、その順序というような分かりきつたことさえ、いい加減にする婦人が次第に出かかるようであります。これでは家庭というものは全くめちやめちやになるほかないでしょう。これと申すのも畢竟女が正しい躰けもない身を以て、自分をそれ程だらしないとも気付かずにいるところに、一切のかかる誤りの生ずる根本原因があるというべきであります。

そこであなた方は、現在自分の身の周りの整頓を正しくすることは言うまでもありませんが、さらに一步を進めて、お父さんと兄さんなどのお机の整理などをしてあげるといいう位の気転が利くようであれば、女甲斐がないというものです。あなた方のような若い娘さんの修養は、結婚後主婦として妻として、また母として、大切な心がけを今日娘として

のわが生活の上に実現するには、一体いかなることを為すべきかという点の工夫をすることを言えましよう。かくして初めて真の工夫であり、そこに初めて修養への具体的な一歩が踏み出されるわけであります。結婚後の心得をいかに感心して聞いてみたとして、それを現在娘としてのわが生活の上に活かすにはどうしたらよいかということに思いおよばないで、ただ将来結婚したら自分もそうしようと思う程度では、幾年修身の話聞いたとて到底行われるものではないでしょう。(栗山知恵子記)

「修身教授録」第四卷同志同行社昭和15年刊・天王寺女子師範における講義から)

### 森信三先生の短文紹介

## 微言

森 信三

○無神論者とは神と背中合わせをしている人間の謂いである。

○神は無神論者をも容れて拒斥しない。ただ無神論者自身それに気づかないだけである。

○無神論者は例えパンが食べられるものだということを知らない未開人が、パンの山積している倉庫の中でパンに取り囲まれながら餓死に瀕しているようなものである。

○マルキシズムには神と悪魔とは共在している。

○マルキシズムの宿命的二重性格はその共産的愛と暴力革命の主張との両面にある。

○悪魔はついに神に勝ちえぬように、マルキシズムにあってもその暴力革命性はその最終的なるものではありえないであろう。

○もしマルキシズムにおいて、この否定的要素が自覚せられたならば、それは最早厳密にはマルキシズムとは言い得ないかもしれぬ。而してここにマルキシズムの免れ得ない宿命性があると言える。

○従来の宗教がマルキシズムの立場から「阿片」と言われることは正当といわねばならぬ。個人救済の立場に立つ従来の宗教にあつては、その未来は彼岸的未來であつて、現実の歴史的未来ではなかつた。このことは従来の宗教が彼岸への観念的逃避の立場に立つものとして、それが社会的正義実現の立場から「阿片」と呼ばれることは、その立場からは決して誤謬とはいへまい。

○宗教家が自分の立場に「阿片性」のあることを承認し、又マルキストが自らの立場に伏在しているその悪魔性を自覚する時初めて、宗教とマルキシズムという二大真理は一つの現実的調和にもたらされるであろう。

○宗教は対自批判絶対、对他批判皆無の立場であり、これに反してマルキシズムは对他批判絶対、対自批判皆無の立場といつてよい。さすれば、これら両者の立場の現実的統一こそ、今後の最大課題といふべきであろう。

○現在の宗教家のうち、自らの裡に阿片性の存することを自覚している者が果たしてどれほどあるであろう。

○マルキシズムは対自批判皆無だといふときその立場からは定めし異論があることであろう。しかし自己の立場そのものに対する根本反省の行われなにかぎり、その所謂自己批判と称するものは自慰的相対的なものにすぎない。

○宗教が对他批判皆無というのは一切を自己に帰すべきことを説いて、制度的悪については一言も言及すること無きことによつて明らかであろう。

○宗教とマルキシズムとの統一は民族的回心によるほかない。回心において宗教的真理が生かされるときにも、民族的回心はその主体が民族たることによつて、その客観的実現は必然に制度的表現をとらざるを得ない。而してここにマルキシズム的真理の一面の摂取がある。

○宗教とマルキシズムと……個人的内面的真理と階級的外面的真理と……これら両種の真理の現実における調和的実現は結局民族回心の立場によるの外ない。

○民族的回心とは各人が自己の裡に、民族の宿業を内観することである。それは単なる個人的内観の底を抜いて、自己のいのちの底に全民族のいのちの宿業を観ずることである。人類はかかる民族的回心を通して初めて真の神に接するものである。

(「開頭」昭和23年2月号)

### あとがきに替えて

森信三先生の「微言」は言いしれぬ感動と緊張感とを与えてくれる。しかも何度も反芻して尚嘖み砕けないところが學生には多くある。大変高い厚い壁だ。それだけ読み応えがあるということだ。外に比肩せる誰の文章があるというか、學生には審判にしてその具体名がない。▼現民主権は柳田法相の首を泣く泣く切った。しかしそれでも尚もたまたましている。政権の体を成していない。国民が選んだ政権だが、再び国民に再考してもらわないとどうにもならない。學生は民主に投票はしなかったが、決して自民が素晴らしいという気もしない。何とかましな人々を国会に送らないと日本が沈没する。この危機感を二人でも多く共有しないとイケない。本当にまじめによく考えて人や政党を選ばべきだ。もたもたする時間はない。何時か閣に外国人が上陸するかも知れないのだ。さつさと対応策を具体化しないとイケない。後手後手で尚かつ無策に等しい政権はさつさと葬る

〒63310003 桜井市朝倉台東二丁目五三八一九  
TEL・FAX 0744145134 22 臂 繁 一 一 発行  
E-mail: hiji@kon.jp  
http://web1.kon.jp/syushin/

(23日二繁)

### 第96回「かよう会」のご案内

日時 平成22年12月21日(火)  
18時30分～(毎月第三火曜日原則)  
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』  
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)  
06-6531-3686

交通 地下鉄：四つ橋線四ツ橋駅下車  
2番出口へ。歩30秒  
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」  
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との  
連絡口で直結。

テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)  
2300円(大きな書店で購入)  
12/21松陰先生の片鱗  
1/18雑話  
2/15血・育ち・教え

参加費 1000円

飛耳長目（ひじちょうもく） 通巻85号 平成22年12月1日発行